

# 宰相の「ことば」

# 論 耕

コロナ危機でかき消されがちだが、この国会は「桜を見る会」疑惑、東京高検検事長の定年延長などへの安倍晋三首相の説明責任も焦点だ。宰相の「ことば」はどうあるべきなのか。

## 「異論」脅威「自己愛」の形



1968年生まれ。対人関係療法の第一人者。著書に『『つい感情的になってしまう』あなたへ』(近刊)など多数。

みずしま ひろこ  
水島 広子さん

精神科医、元衆院議員

ことが考えられます。そんな選挙では、もっぱら威勢のいいことを言う候補が当選していませんか。タカ派の主張は一見毅然として見えます。長くしんみりとした演説をする政治家より、キャッチフレーズのような短い一言をパツと言う政治家がもてはやされていますか。

安倍さんの国会での答弁、ヤジ、イライラとした表情を見てみると、自分とは異なる意見を言われ、それを自分への脅威とみなして反撃しているように見えます。人間は、「攻撃を受けた」と感じなければ、他人を攻撃するようにはできていないからです。

政治家は自己愛が強いと言われます。「自分は特別な存在」という性格そのものは、私は全否定しません。人を酔わせる演説も、自己愛が強くなければできませんから。自己愛は多くの政治家にとって不可欠なエネルギー源です。

しかしもう一つ、まっとうな政治家に欠かせない条件があります。それは、他者への共感力です。他者とは、自分とは異なる意見をもつ人たちも含みます。

ひと昔前の自民党政治家には、自己愛と共感力を車の両輪のように併せ持つ人が少な

くなかったように思います。「ためのある」政治家と云っていいかもしれません。

たとえば田中角栄さんは、地方に道路をどんどん造ってしまおう一方、恵まれない人への人情や涙もろいところもあった。森喜朗さんだって、国会答弁などで野党議員だった私への気遣いを感じたことがあります。力をもつ与党政治家は、力をもっているがゆえに、力をもたない人たちの声も聞く——という鷹揚さ、寛容さがあったのです。

今や、そんな政治家はめっきり少なくなつた、と感じるのは私だけでしょうか。

その背景としては、最近の国政選挙が「劇場型」となり、その時々「風」や「振り子現象」のおかげで、さほど苦勞しなくても当選した議員が国会に多数送られている

ことが考えられます。そんな選挙では、もっぱら威勢のいいことを言う候補が当選していませんか。タカ派の主張は一見毅然として見えます。長くしんみりとした演説をする政治家より、キャッチフレーズのような短い一言をパツと言う政治家がもてはやされていますか。

自己愛だけが強い人は自分と似た人を「仲間だ」と感じ、異論を唱える人は排除し、仲間だけを重用します。仲間を作ることで「自分は特別な存在」感が増すからです。

安倍さんはいま、新型コロナウイルス感染症への対応で、国民の怒りを買っています。ただしこの怒りも、実は破壊性をもっている点に注意が必要です。第1次安倍政権の時には、「消えた年金」に対する国民の怒りがあり、やがて民主党に政権が移行しました。怒りを利用する政治は、その怒りがブーメランとなって自分に返ってきます。それが民主党政権でした。

「ポスト安倍」を狙う政治家には、人々の怒りを利用するのではない形で、私たちに政策の選択肢を示してほしいと思います。

(聞き手・稲垣直人)